島根大学医学部紀要，第39巻，59～66頁，2017年3月

実 践 報 告

『看護学科と看護部との連携・協働による「がん看護実践者」育成プロジェクト』の取り組み －アンケート結果－

（がん看護／実践者／育成）

宮本冬美[1)]・玉田明子[2)]・佐藤美紀子[2)]・荒木もも子[1)]・吉野拓未[3)]・
福永まゆみ[1)]・森山美香[2)]・今岡恵美[1)]・秋鹿都子[2)]・三吉由美子[1)]・
大森眞澄[4)]・岩谷とよこ[1)]・田中真美[1)]・妹尾尚美[1)]・陰山美保子[1)]・
竹本和代[1)]・井上和子[2)]・日原千恵[1)]・秦美恵子[1)]・矢田昭子[2)]

The Approach of Educational Project "Oncology Nurse Practitioner" by the Collaboration With Department of Nursing and School of Nursing : The Results of Questionnaire Surveys

（oncology nursing / practitioner / education）

Fuyumi MIYAMOTO, Akiko TAMADA, Mikiko SATO, Momoko ARAKI, Takumi YOSHINO, Mayumi FUKUNAGA, Mika MORIYAMA, Emi IMAOKA, Satoko AIKA, Yumiko MIYOSHI, Masumi OMORI, Toyoko IWATANI, Mami TANAKA, Naomi SENO, Mihoko KAGEYAMA, Kazuyo TAKEMOTO, Kazuko INOUE, Chie HIBARA, Mieko HATA, Akiko YATA

【要旨】がん看護についての看護基礎教育の不十分さや知識・技術の不足などを解決するために、2013年度から『看護学科と看護部との連携・協働による「がん看護実践者」育成プロジェクト』を立ち上げ、３年間で研修会６回、ワールドカフェ２回、事例検討会９回を実施した。看護職、看護学科の教員･学生および大学院生、他職種を対象とし、延べ参加者は研修会476名、ワールドカフェ 66名、事例検討会212名だった。それぞれの企画についてアンケート調査を実施し、看護実践への活用の可能性について問うたところ、研修会375名（93.7%）、ワールドカフェ 40名（93%）、事例検討会177名（97.3%）が活用できると肯定的に回答した。自由記述では、「自身の看護を振り返る機会」「他病院の現状や取り組みを聞くことによる新たな発見」「看護実践の中で誰もが感じる苦悩を共有し活路が見いだせる体験」などの記載があった。

本プロジェクトを継続して実践したことで、タイムリーな話題を他施設の看護職とともに学び語り合うことで、新しい知識を習得し看護観をみつめ直すことができ、多角的な視点で看護実践をすることの重要性が示唆された。

Ⅰ．諸　　言

がん医療が高度に進展する中、看護職は小児から高齢者の多様なニーズをもつがん患者とその家族に対して、がん診断時から終末期までの看護実践に困難を感じていることが多い[1)]。一方､看護基礎教育における「がん看護学」に関する研究において、学生ががん患者と接することによって「苦痛の強い患者」「告知後の患者」「複雑な病態の患者」など、がん患者への対応に困難感を実感していると報告されている[2)]。これらのことから、看護基礎教育から卒後教育にかけて、特に医療の

[1)] 島根大学医学部附属病院看護部
Department of Nursing, Shimane University Hospital
[2)] 島根大学医学部臨床看護学講座
Department of Clinical Nursing, Shimane University Faculty of Medicine
[3)] 福岡女学院看護大学看護学部
Fukuoka Jo Gakuin Nursing University
[4)] 島根県立大学看護学部
The University of Shimane, Faculty of Nursing

進歩に対応した新しいがん看護の実践と根拠についての教育が不十分となりやすいと考える。さらに、高知県では「がんにおける質の高い看護師育成事業」が実施された結果、がん看護の研修の継続、研修内容の検討、モチベーションの維持、組織への働きかけなど多くの課題が明らかになっている[3)]。

これらは、いずれの病院でも抱えている課題であるため、私たちは2013年度から『看護学科と看護部との連携・協働による「がん看護実践者」育成プロジェクト』（以下、プロジェクト）を立ち上げた。本プロジェクトでは、看護学科と看護部が連携・協働し、地域での暮らしと看取りまで見据えたエビデンスのある「がん看護」の実践者（教員、学部生及び大学院生、看護師）を育成するために、研修会、ワールドカフェ、事例検討会を開催した。

Ⅱ．実施方法

１．活動内容

本プロジェクトの主な活動内容として、島根大学医学部看護学科（以下、看護学科）の教員・学生および大学院生と附属病院看護部（以下、看護部）の看護職を対象とした研修会、ワールドカフェ、事例検討会を開催した。また、研修会、ワールドカフェにおいては、島根県内の病院や訪問看護ステーションの看護職も対象とした。

研修会は、最新のがん看護に関する知識を習得するために、抗がん薬治療、緩和ケア、看護倫理などをテーマに計６回開催した。ワールドカフェは、県内のがん診療連携拠点病院や地域の看護職との交流を促進し、島根県全体のがん看護の質向上を図るために、抗がん薬治療、患者のライフサイクルに着目したテーマを取り上げ計２回開催した。事例検討会においては、看護部と看護学科の連携による看護実践力の向上をめざし、臨床で看護介入に難渋しているがん患者の事例を取り上げ計９回開催した。それぞれの企画についてアンケート調査を実施した。

２．アンケート対象者

2013～2015年度までのプロジェクトに参加した看護職、看護学科教員・学生および大学院生、ソーシャルワーカー。

３．データ収集方法

研修会、ワールドカフェ、事例検討会の参加者全員に無記名自記式質問紙調査を行った。 調査項目はがん看護実践およびスタッフや学生への教育に活用できるかなどとし、「全くそう思う」～「全く思わない」の5段階で回答を得た。自由記述として、参加した感想と得られた学びについて回答を得た。

４．分析方法

参加者の属性を単純集計した。調査項目については、「全くそう思う」～「全く思わない」の各段階の割合を算出した。研修会およびワールドカフェに対する自由記述については、各テーマに沿った感想や学びに関する記述内容を抽出した。また、事例検討会の自由記述については、感想や学びの内容に対して、Berelson, B.の内容分析を行った[4)]。事例検討会のアンケートの自由記述から「参加しての感想や得られた学び」が記述されている1文章を文脈単位として抽出し、１データとした。分析対象とする記述を意味内容の類似性に従い分類し、その分類を忠実に反映したカテゴリー名をつけた。分類とカテゴリー名は、がん看護を専門領域とする研究者を含む共同研究者間で繰り返し検討することにより信頼性と妥当性を確保した。

５．倫理的配慮

研修会、ワールドカフェ、事例検討会の各参加者には、アンケート配布時に参加は個人の自由意思であること、プライバシーを保護すること、今後の参考資料とすることなどを伝えた。アンケートは無記名自記式で個人が特定されないようにし、提出をもって参加への同意とした。また、回答後のアンケートは各自が会場内に置かれた回収箱へ投函した。回収箱の設置は当日のみとし、施設管理者やプロジェクト関係者の強制力がかからないように配慮した。自由記述の分析において個人が特定されるようなデータはすべて削除した。

Ⅲ．結　　果

１．参加者の概要

研修会は６回実施し、延べ参加者476名であった。参加者の属性は看護部看護職172名（36％）、他施設看護職107名（23％）、看護学科教員52名（11％）、看護学科学生および大学院生145名（30％）であった。ワールドカフェは２回実施し、延べ参加者66名であった。参加者の属性は看護部看護職31名（47％）、他施設看護職22名（33％）、看護学科教員12名（18％）、大学院生１名（２％）であった。事例検討会は９回実施し、延べ参加者213名であった。参加者の属性は看護部看護職152名（72％）、看護学科教員58名（27％）、その他３名（大学

院生２名、他職種１名）（１％）であった。

２．アンケート結果

１）研修会

456名に配布し、回収数400名（回収率87.7％）であった。「研修会はあなたの看護実践に活かせそうですか。」では、「全くそう思う」177名（44.2％）、「そう思う」198名（49.5％）であった。「研修会はチームでの看護実践に活かせそうですか。」では、「全くそう思う」154名（38.5％）、「そう思う」197名（49.2％）であった。「研修会の内容はわかりやすいものでしたか。」では、「全くそう思う」233名（58.3％）、「そう思う」159名（39.7％）であった。「研修会はスタッフまたは学生の教育に活かせそうですか。」では、「全くそう思う」129名（32.2％）、「そう思う」183名（45.8％）であった。

自由記述については、第１回～第６回の各テーマに沿った感想や学びに関する記述内容を抽出した（表１）。

第１回『みんなで考える看護倫理』では、「日々悩んでいたことが理論を用いて、また看護協会倫理綱領やリスボン宣言を用いて検証したことですっきりした」などの記述があった。

第２回『がん患者の退院支援と看護者の役割について』では、「地域の文化などの特徴を理解すること、対象者がどう過ごしたいと思っているのかタイミングをつかんで傾聴することの大切さを学んだ」などの記述があった。

第３回『倦怠感の生じるメカニズムと治療・ケアの実際について』では、「倦怠感のメカニズムが分かり、患者にとって心地よいケアを患者と一緒に考えながら行っていきたいと思った」などの記述があった。

第４回『がん患者の“その人らしく生きる”を支える看護』では、「本当に患者と家族が望んでいたケアだったのか改めて考え、看護、生きること、寄り添うことなどを考えていきたいと思った」などの記述があった。

第５回『患者・家族・職員を支える３Ｄサポートチームの取り組み－立場の違う人と人との隙間を埋めるための実践－』では、「チームの協力でお互いの学習や信頼関係の構築につながっていると分かり、改めてチーム全体でケアをすすめることの重要性を感じた」などの記述があった。

第６回『AYA（Adolescent and Young Adult）世代のがん患者についてともに学ぼう in 島根』では、「AYA 世代のがん患者の割合は少なく看護師は苦労するが、今回の研修会でどのようなサポートが必要か考えるきかっけになった」などの記述があった。

２）ワールドカフェ

46名に配布し、回収数43名（回収率93.5％）であった。「ワールドカフェはあなたの看護実践に活かせそうですか。」では、「全くそう思う」24名（55.8％）、「そう思う」16名（37.2％）であった。「ワールドカフェはチームでの看護実践に活かせそうですか。」では、「全くそう思う」26名（60.5％）、「そう思う」13名（30.2％）であった。「ワールドカフェの内容はわかりやすいものでしたか。」では、「全くそう思う」30名（69.8％）、「そう思う」11名（25.6％）であった。「ワールドカフェはスタッフまたは学生の教育に活かせそうですか。」では、「全くそう思う」24名（55.8％）、「そう思う」15名（34.9％）であった。

自由記述については、第１回、第２回の各テーマに沿った感想や学びに関する記述内容を抽出した（表２）。

第１回『抗がん薬治療を受ける患者の看護について語り合おう』では、「自施設の抗がん薬治療に関する課題が見えた。他施設の看護師の話や、MSW（Medical Social Worker）の話を聞き非常に刺激を受けた。病棟での看護に役立てたいと思う」などの記述があった。

第２回『ライフサイクルの視点からがん患者の暮らしを支えるケアについて語り合おう』では、「『人は不安を持って生まれてきた』、無力感や罪悪感などネガティブな感情も抱いていてよいことを、そんな自分に気づくことの大切さを実感した」などの記述があった。

３）事例検討会

９回の事例検討会の参加者193名に配布し、回収数182名（回収率94.3％）であった。「事例検討会はあなたの看護実践に活かせそうですか。」では、「全くそう思う」111名（61.0％）、「そう思う」66名（36.3％）であった。「事例検討会はチームでの看護実践に活かせそうですか。」では、「全くそう思う」108名（59.4％）、「そう思う」65名（35.7％）であった。

自由記述については、９回の事例検討会における感想や学びに関する記述を全て抽出し、内容分析を行った（表３）。抽出された文脈単位の合計は85であった。

自由記述の「事例検討会に参加しての感想や得られた学び」から抽出された内容は、【看護実践の手がかり】【自己理解を通した看護のみつめ直し】【子どもを含めた家族支援の必要性】【事例検討会のよさを実感】の４つのカテゴリーに分類された。【看護実践の手がかり】では36文脈単位（42.4％）に分割され、3のサブカテゴリーが抽出された。【自己理解を通した看護のみつめ直し】では24文脈単位（28.2％）に分割され、４のサブカテゴリーが抽出された。【子どもを含めた家族支援の必要性】では14文脈単位（16.5％）に分割され、４のサブカテゴリーが抽出された。【事例検討会のよさを実感】

表１　自由記述「研修会に参加しての感想や得られた学び」（一部抜粋）

第１回研修会『みんなで考える看護倫理』
・「日々悩んでいたことが理論を用いて、また、看護協会倫理綱領やリスボン宣言を用いて検証したことですっきりした」
・「患者の思いに答えることができなかったことを、業務や忙しさのせいだと流してきた事に気づかされた」
・「どのように生きたいか、家族と一緒に『本人の願いを叶えていきましょう』と引き受けることが大切であると学んだ」
・「どこでも同じような倫理的ジレンマを感じながら働いておられ、思いを共感し、様々な考え方を知ることができた」
第２回研修会『がん患者の退院支援と看護者の役割について』
・「地域の文化などの特徴を理解すること、対象者がどう過ごしたいと思っているのか、タイミングをつかんで傾聴することの大切さを学んだ」
・「退院後の環境や、必要な支援、価値観のすり合わせを行えるよう援助していくことが重要であると感じた」
・「短期入院が多い中、患者との関わりや退院に向けての介入に困難を感じていたので、たくさんのヒントを得ることができた」
・「退院支援に日々関わっているが、本当の意味で調整できるよう、在宅のことをもっと知る必要があるなと思った」
第３回研修会『倦怠感の生じるメカニズムと治療・ケアの実際について』
・「倦怠感のメカニズムが分かり、患者にとって心地よいケアを患者と一緒に考えながら行っていきたいと思った」
・「倦怠感は後回しになりがちで、対応のスピーディーさに欠けることもある。住み慣れた家での『快』を高めるケアを目指していきたいと思う」
・「倦怠感が強いと身の周りのことができなくなるため、葛藤を抱えながら日々関わっている。倦怠感を改めて理解した上で、ケアしようと思った」
・「倦怠感は漠然としていて、患者への関わりに悩んでいた。倦怠感の原因を取り除くことが生活を送る上で必要なことだと思った」
・「患者がしんどいという思いを表出でき、多職種と連携し患者の思いを伝え、少しでも安楽に過ごせるよう介入できる看護師になりたいと思った」
第４回研修会『がん患者の“その人らしく生きる”を支える看護』
・「診断の時から生き方の選択に寄り添うことが大切だと分かり、実践していかなければならないと思った」
・「本当に患者と家族が望んでいたケアだったのか、改めて考え、看護、生きること、寄り添うことなどを考えていきたいと思った」
・「寄り添える看護師になりたいと思った。『親切だけではおせっかい』という言葉に、すごく衝撃をうけた」
・「先生が言われた患者の言葉を聞き、普段自分が患者の思いと声を聞き流し、読み間違えていたのではないかとハッとした」
・「自分を理解していないと患者を理解すること（ケアリング）はできない。当たり前だけど、難しいこの課題に精一杯取り組んでいきたいと思う」
・「死や病、そしてそれをひっくるめた生についての姿勢や覚悟が問われるなあと思う」
・「患者が目標に向かって生きられるように考えて対応していることが、間違っていないことを確信し、さらに知識を深めたいと感じた」
第５回研修会『患者・家族・職員を支える3Dサポートチームの取り組み―立場の違う人と人との隙間を埋めるための実践―』
・「日々の看護の中で、迷い、苦しむ現状は時に訪れるが、まわりの人の力をまき込み、前進する大切さを学び、活かしていけたらと思えた」
・「患者を精神面・社会面・身体面など様々な方向から見つめ直していこうと、改めて感じられた」
・「今までは自分達の思い込み、勝手な診断も含まれていたと実感した。患者の思いに寄り添うこと、チームで考えることの大切さが分かった」
・「チームの協力で、お互いの学習や信頼関係の構築につながっていると分かり、改めてチーム全体でケアをすすめることの重要性を感じた」
・「見方を変えると、こんなにも患者が違って見えることを実感した。心を看ることは難しいが、逃げずに向き合っていくことが大切だと感じた」
第６回研修会『AYA世代のがん患者についてともに学ぼうin島根』
・「AYA世代の患者と関わる看護師としての自分を主語にして考えることが多かったが、この世代特有の社会や病気の捉え方を初めて知ることができた」
・「ＡＹＡ世代のがん患者の割合は少なく、看護師は苦労するが、今回の研修会でどのようなサポートが必要か考えるきかっけになった」
・「患者は妊孕性や学業、仕事についての不安があり、今日の研修会を通して、その人らしく生きるために早期に介入していきたいと思った」
・「長い一生を病気によって『人生が変わった』という事実を消化していかなければならないAYA世代の精神的社会的サポートの重要性を感じた」
・「AYA世代の『夢』を閉ざさない治療を育むことが大切だと思った。我々も当事者であるという思考で、人として向き合う大切さを教わった」
・「患者自身が本心をなかなか語れず、家族が代弁される例も多くある。できるだけ本人を、希望をもってサポートしていきたい」

表２　自由記述「ワールドカフェに参加しての感想や得られた学び」（一部抜粋）

第１回ワールドカフェ『抗がん薬治療を受ける患者の看護について語り合おう』
・「自施設の抗がん薬治療に関する課題が見えた。他施設の看護師の話や、MSWの話を聞き、非常に刺激を受けた。病棟での看護に役立てたいと思う」
・「抗がん薬治療を通して、“どう生きるか”だけでなく“どう最期を迎えるか”という対象の方の人生まで捉えることの大切さを実感し、深く学んだ」
・「グループワークで多くのことを語ることができ、それぞれの部署で看護を追及されていることが分かり、とても有意義だった」
・「自分の中にない考え方を聞く事が出来て、とても良い学びとなった。喝を入れられた気持ちだったが、やる気スイッチにかえて頑張れそう」
・「島根県にある病院で働くスタッフが色んなことを感じていること、悩みを話しながら、今後もっと良くなることにつながっていくことが嬉しく思った」
・「“連携”という言葉の意味、自分はどう動いているのか、他の施設の人の話が聞けて良かった。自分も発信力を持たなくてはと思った」
第２回ワールドカフェ『ライフサイクルの視点からがん患者の暮らしを支えるケアについて語り合おう』
・「『人は不安を持って生まれてきた』、無力感や罪悪感などネガティブな感情も抱いていてよいことを、そんな自分に気づくことの大切さを実感した」
・「患者の１番の希望をみつけ、優先順位をつけて少しずつ支援していくことが必要だと感じた」
・「無力である自分に気づくことも大切だと気づいた。患者に寄り添い、あなたのことを思っていることを伝えていきたい」
・「何でもできると思わずに、患者に何が必要で、看護師はどこが支援できるかを見極めること、そして、多職種と連携することが必要だと思った」
・「色々な人と語り合えて、学びが多く、気持ちも少し楽になり、有意義な一日だった」

では11文脈単位（12.9％）に分割され、３のサブカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを＜　＞、参加者の実際の記述を「　」で示す。

【看護実践の手がかり】では、＜患者の気持ちに寄り添うこと＞に関する記述が最も多く、19文脈単位が抽出された。具体的な内容は「危機的状況や体調の良いときなど揺れ動いている時に、患者の思いに寄り添っていくことが重要と感じることができた」などであった。次に多かった記述は＜言動への意味づけ＞であり、９文脈単位が抽出された。「患者がどんな思いでその言葉を言っておられるのかを考えることは大切」などの記述があった。また、参加者は＜患者・家族の意向のすり合わせ＞についても、「終末期がん患者の事例を通して、本人と家族の意向をすり合わせながら状態に応じたケアを行う難しさと大切さを改めて学んだ」など８文脈単位に記述があった。

【自己理解を通した看護のみつめ直し】では、＜自分の気持ちと看護のみつめ直し＞および＜色々な意見を聞くことによる視野の広がり＞に関する記述が最も多く、各7文脈単位が抽出された。前者の具体的な内容は、「発言の意味を振り返って、自分の気持ちを考えることが大切だと改めて感じた」などであった。また、後者では「当事者だけのカンファレンスで見落とされた部分や、考え方、見方により異なった意見が聞けて非常に勉強になった」などの記述があった。次に多かった記述は＜看護の共有＞であり、６文脈単位が抽出された。「事例検討会で共有することにより、『看護』が実感できる時間」などの記述があった。さらに、事例検討会は参加者にとって＜看護観について考える機会＞となっており、４文脈単位が抽出された。「看護師として、どうすれば患者、家族が納得のいく生活を支えられるかが大切だと思う」などの記述があった。

【子どもを含めた家族支援の必要性】では、＜患者を中心に家族を支えることの重要性＞に関する記述が最も多く、７文脈単位が抽出された。具体的な内容は「家族でも色んな考えがあるが、やっぱり患者は何がしたいのかということを中心に、家族がまとまれることが一番いいことだと思った」などであった。次に多かった記述は、＜子どもにも関わることの必要性＞であり、３文脈単位が抽出された。「子どもの存在、理解力も含めて、子どもへのケアの大切さを学べた」などの記述があった。さらに参加者は、＜家族の役割を尊重した関わりの大切さ＞＜家族を置き去りにしないケアの重要性＞も感じており、各２文脈単位が抽出された。前者では「患者の思いに沿うことも大切だが、周囲の家族それぞれの役割を考え対応していく重要性を学んだ」、後者では「患者の思いを受け止めるとともに、家族が置き去りにならないように家族ケアをしていくことの重要性に気づいた」などの記述があった。

【事例検討会のよさを実感】では、＜事例検討会を行うことの意義＞に関する記述が最も多く、５文脈単位が抽出された。具体的な内容は「事例を発表すると自分ができていないことばかりに目がいって辛いが、できていたこともあるとわかった」などであった。次に多かった記述は＜自由に語り合える雰囲気＞であり、４文脈単位が抽出された。「堅苦しい事例検討会ではなく、自由に語り合う事ができた」などの記述があった。また、事例検討会では＜参加者の成長・頼もしさ＞も感じられており「卒業生が日々成長しているなと感じた」など、２文脈単位に記述があった。

Ⅳ．考　　察

プロジェクトのアンケート結果では、ほぼ肯定的な結果が得られた。以下、研修会、ワールドカフェ、事例検討会の各活動の成果と課題について考察する。

１．研修会について

研修会のアンケート結果より、90％以上が「看護実践に活かせそう」「わかりやすい内容」と回答した。さらに、「短期入院が多い中、患者との関わりや退院に向けての介入に困難を感じていたので、たくさんのヒントを得ることができた」などの記述があり、参加者は研修会を肯定的に捉えていたと考える。これは、がん看護領域の知識・実践経験が豊富な看護職を含むプロジェクトメンバー全員が、学びたい内容を出し合い、協議の上で各研修会のテーマを決定したことで、がん看護を取り巻く最新の情報を反映した内容となり、臨床で働く看護職の関心、対応に難渋している課題に焦点が当たったためと考えられる。

看護倫理に関する研修会では、参加者は看護実践の基盤となる考え方を学んだ一方、「日々倫理的ジレンマを感じている」「今後、倫理についてもっと学びたい」と記述した。倫理に関しては、先行研究においても研修による教育効果が低いという結果や[5]、専門看護師教育においても課題があり[6]、倫理的問題への対処は理解できても実践活動へとつなげることは容易でないといわれる[3]。今後は倫理に関する研修会に加えて事例検討会なども継続して行い、より実践につながる内容を検討する必要性が示唆された。

退院支援に関する研修会では、参加者は、患者の入院期間が短縮化される中、症状を抱えながらも“その

表３　自由記述「事例検討会に参加しての感想や得られた学び」（第１回～第９回）（　　）内は文脈単位

カテゴリー	サブカテゴリー	記述例　　合計：85文脈単位
【看護実践の手がかり】（36）42.4%	＜患者の気持ちに寄り添うこと＞　(19)	・「危機的状況や体調の良いときなど揺れ動いている時に、患者の思いに寄り添っていくことが重要と感じることができた」 ・「患者の思いを率直に聴いてみてもよいと感じた」 ・「短期間の入院で患者・家族の思いをしっかり聴くことの必要性を感じた」 ・「医療者側の予測だけでなく、患者家族に実際に話をして聴いて、介入することも大切だと思った」 ・「何が答えというのはなく、それぞれの思いを引き出していくことも、とても大切なことだと感じることができた」
	＜言動への意味づけ＞　(9)	・「患者がどんな思いでその言葉を言っておられるのかを考えることは大切」 ・「家族のネガティブな感情の表出に対して意味づけができた」 ・「患者・家族のこれまでの経過や、家庭や社会での役割をふまえて、言動の意味を考えていくことが必要であると思った」
	＜患者・家族の意向のすり合わせ＞　(8)	・「終末期がん患者の事例を通して、本人と家族の意向をすり合わせながら、状態に応じたケアを行う難しさと大切さを改めて学んだ」 ・「医療者の目線でこうだといいのにという気持ちは捨て、それぞれの人の思いを受けとめることが大切だと思った」 ・「患者の思いは何か、それを叶えるためにどんな人にどんな力を借りられるのか、立場を考えて看護ケアをすることが大事だと思った」 ・「『その人らしさ』を大切にする関わり、家族とのコミュニケーション、多職種や他施設とのコミュニケーションの大切さを学んだ」
【自己理解を通した看護のみつめ直し】（24）28.2%	＜自分の気持ちと看護のみつめ直し＞　(7)	・「発言の意味を振り返って、自分の気持ちを考えることが大切だと改めて感じた」 ・「たくさんの意見・思いを聞いて、気持ちがすっきりし、自分の看護に自信がもてた」 ・「自分が看護において大切にしていることは何か考えることができた」
	＜色々な意見を聞くことによる視野の広がり＞　(7)	・「色々な意見や思いを聞かせてもらい、視野も広がった」 ・「当事者だけのカンファレンスで見落とされた部分や、考え方、見方により異なった意見が聞けて、非常に勉強になった」 ・「病棟での関わりでは見えない外来での関わりがあることに気づかされた」 ・「配偶者の訴えは色んな感情の中の一つであることに気づいた」
	＜看護の共有＞　(6)	・「事例検討会で共有することにより、『看護』が実感できる時間」 ・「様々な人がもっている情報をみんなで共有することで、新たな患者像が見えてくることを学んだ」 ・「実践の中で誰もが悩むことで、そのまま活かせる内容」
	＜看護観について考える機会＞　(4)	・「自分の看護観について考える機会になった」 ・「患者の“ニード”について改めて考える機会になった」 ・「看護師として、どうすれば患者、家族が納得のいく生活を支えられるかが大切だと思う」
【子どもを含めた家族支援の必要性】（14）16.5%	＜患者を中心に家族を支えることの重要性＞　(7)	・「患者夫婦で良い時間を過ごせるように看護師は家族を支えることが重要だと感じた」 ・「夫婦の絆をチームで支える看護師の姿に胸が熱くなり、本人を中心に家族を支える看護のあり方について、多くを学んだ」 ・「家族でも色んな考えがあるが、やっぱり患者は何がしたいのかということを中心に、家族がまとまれることが一番いいことだと思った」
	＜子どもにも関わることの必要性＞　(3)	・「子どもの存在、理解力も含めて、子どもへのケアの大切さを学べた」 ・「子どもへの対応の仕方、悲しみの表出の重要性を学ぶことができた」 ・「子どもはおとなの想像以上に色んな事を考えているため、子どもへの関わりの重要性を感じた」
	＜家族の役割を尊重した関わりの大切さ＞　(2)	・「患者の思いに沿うことも大切だが、周囲の家族それぞれの役割を考え、対応していく重要性を学んだ」 ・「本人の家族の中での役割を行うことで、存在意義を感じているなど、考えを深めることができた」
	＜家族を置き去りにしないケアの重要性＞　(2)	・「患者の思いを受け止めるとともに、家族が置き去りにならないように家族ケアをしていくことの重要性に気づいた」 ・「思いを語れる患者・家族は介入の必要性に気づけるが、家族だけで抱えている人への看護介入も忘れてはならないと思った」
【事例検討会のよさを実感】（11）12.9%	＜事例検討を行うことの意義＞　(5)	・「丁寧に事例検討を重ねていくことの必要性を学んだ」 ・「できた場面を分析して、今後のケアに生かしていくことも大切だと思った」 ・「事例を発表すると自分ができていないことばかりに目がいって辛いが、できていたこともあるとわかった」 ・「患者の思いを最優先に看護してきたことがぶれていなかったことを、学科の教員の言葉を聞いて実感できた」
	＜自由に語り合える雰囲気＞　(4)	・「皆が発言できる雰囲気だった」 ・「堅苦しい事例検討会ではなく、自由に語り合う事ができた」 ・「たくさんのスタッフから意見が出て、話し合えることのすばらしさが再確認できた」
	＜参加者の成長・頼もしさ＞　(2)	・「卒業生が日々、成長しているなと感じた」 ・「参加者の優しさや感性を頼もしく思った」

人らしい”暮らしを見据えた支援の重要性について学んでいた。症状の中で看護職が特に対応に難渋する倦怠感は、第３回研修会のテーマにあげられ、参加者は倦怠感のメカニズムと症状マネジメントを理解することにより、生活の質を向上させるケアについて具体的に学べたと推察される。さらに、診断時から看取りまで安心・安楽な在宅生活を送るために、第５回研修会では、参加者はチームにおける多職種連携について学んだことで、患者を多角的に捉える機会を得ていたと考える。また、ライフサイクルの視点では、15～39歳の思春期・若年世代（AYA 世代）のがん患者に関する研修会も行った。この世代は、就学、就労、結婚等の様々な出来事が闘病と重なる時期でもあり、中高年のがん患者と比べても AYA 世代特有の心理社会的問題があるにも関わらず、国内での AYA 世代がん患者の現状把握は不十分であり、対策が遅れているといわれる[7]。さらに、研究成果の報告も少ないため、AYA 世代がん患者の対策は看護においても喫緊の課題であり、この最新のトピックスを入れることで参加者は新たな知識をタイムリーに習得できたと考える。

２．ワールドカフェについて

ワールドカフェのアンケート結果より、90％以上が「看護実践に活かせそう」「わかりやすい内容」と回答した。さらに「グループワークで多くのことを語ることができ、それぞれの部署で看護を追及されていることが分かりとても有意義だった」などの記述があり、参加者はワールドカフェを肯定的に捉えていたと考え

る。

抗がん薬治療のテーマでは、島根県内の各施設の状況を知ることで、各自が働く施設の現状を振り返り課題が抽出され、看護を見直すきっかけになったと考えられる。また、患者のライフサイクルのテーマでは、参加者は否定的な感情も含めて語り合えたことにより、「無力である自分に気づくことも大切だと気づいた。患者に寄り添い、あなたのことを思っていることを伝えていきたい」と記述しており、対象をみていく以前に、自己が持って生まれた不安や無力感などに目を向けることの大切さを実感できたと考える。

ワールドカフェは「会話」で相手との関係性を築き、それが土台となり「対話」を通してお互いの価値観や目的を共有し､最後に「具体的になにをしていくのか？」の方策を考えていくために「議論」をしていくことといわれる[8)]。本プロジェクトにおいても､「島根県にある病院で働くスタッフが色んなことを感じていること、悩みを話しながら、今後もっと良くなることにつながっていくことが嬉しく思った」「色々な人と語り合えて学びが多く、気持ちも少し楽になり、有意義な一日だった」との記述から、参加者は「会話」や「対話」の大切さは見出していたのではないかと推察される。しかし、具体的な方策については明確な記述がなかった。今後は、参加者が方策についてどのように「議論」したのか、さらにワールドカフェで見出された方策が現場でどのように活かされたのか検証していくことが課題と考える。

３．事例検討会について

事例検討会のアンケート結果より、90％以上が「看護実践に活かせそう」と回答した。さらに､「当事者だけでのカンファレンスで見落とされた部分や、考え方、見方により異なった意見が聞けて非常に勉強になった」などの記述があり、参加者は事例検討会を肯定的に捉えていたと考える。

自由記述では､【看護実践の手がかり】に関する記述が最も多かった。本プロジェクトの事例検討会では、終末期ケアや患者・家族の意思決定など難渋事例が多く提供され、その中には【子どもを含めた家族支援の必要性】について検討される事例もみられた。子育て世代のがん患者が増加し、家族役割が変化する中、参加者は自分たちの病棟では解決しきれない事例を他病棟の看護職と共有することにより、現在難渋している事例をタイムリーに検討できすぐに活かせる【看護実践の手がかり】をつかんだと考える。次に記述が多かったのは【自己理解を通した看護のみつめ直し】であった。事例検討における効果として、集団によって自分だけでは気づくことのなかった事柄、教科書からは習得しづらい学びを得ることができていると報告されている[9)]。さらに、事例検討では、これまでの自分の思考・視点を振り返り、自分の思考パターンを客観的に捉えることができるとともに、多角的な視点があることに自ら気付き視野を広げることができるといわれている[10)]。本プロジェクトの事例検討会においても、参加者はみつめ直しのプロセスを経ることにより、患者・家族へのケアについて知識レベルでの理解だけでなく、より具体的な実践レベルでの看護の手がかりをつかんだと推察される。さらに参加者は【事例検討会のよさを実感】しており、自ら語り合い、振り返り、気づく体験を共有する機会になっていたと考えられる。

４．成果と課題

本プロジェクトでは、研修会でエビデンスに基づいた基本的な知識を習得し、ワールドカフェや事例検討会を通して意見を交換し多角的な視点や、がん看護に必要な考え方をもつことができ、がん看護の基盤づくりにつながったと考える。さらに、このような語り合う場を設けることで、看護職間や他職種との交流を深めるとともに、自分自身や看護観をみつめ直す機会になったと考えられる。

今後は、参加者ががん看護の実践力を積み上げていけるように研修会、ワールドカフェ、事例検討会を引き続き定期的に開催し、参加者の実践力向上につながったかなどについて検証することが課題と考える。

Ⅴ．結　　語

本プロジェクトでは、島根県内の看護職、看護教員、看護学生および大学院生、他職種を対象とし、がん看護に関する研修会、ワールドカフェ、事例検討会を2013年度から３年間実施した。参加者へのアンケートでは、ほぼ肯定的な結果が得られ、参加者は新たな知識を習得し、他施設の看護職との語り合いを通して看護観をみつめ直すことができ、看護実践の手がかりをつかめたと考えられた。今後もより参加者の希望に沿った内容を検討するとともに、がん看護実践者の育成に寄与できる企画・運営を行っていきたい。

文　　献

１）小幡明香，直成洋子，原島利恵．がん患者の看護についての困難感に関する研究の動向　看護師を対

象とした国内文献に焦点をあてて．茨城キリスト教大学看護学部紀要　2016；7（1）：11-18.
2）飯野京子，岡本隆行，小熊亜希子，他．看護基礎教育における「がん看護学」に関する教育評価．国立看護大学校研究紀要　2008；7（1）：50-59.
3）小笠原麻紀，古郡夏子，藤田佐和，他．高知県における専門分野「がんにおける質の高い看護師育成事業」５年間の成果と今後の課題．がん看護　2014；19（4）：395-401.
4）舟島なをみ．質的研究への挑戦．東京：医学書院；2002：42-53.
5）飯岡恵子，小沢　香，森　明子，他．がん看護専門看護師実習での課題に向けた教育プロフラムの導入と院生の学び　状況判断と倫理調整．第24回日本がん看護学会学術集会講演集　2010；110.
6）新田邦子，松野英美，青木ひふみ，他．がん診療連携拠点病院のスペシャリストが連携して行うジェネラリスト育成研修「緩和」ジェネラリストへの教育効果．第26回日本がん看護学会学術集会講演集　2012；212.
7）公益財団法人がんの子どもを守る会．AYA 世代のがん患者家族のニーズに関する包括的実態調査．http://www.ccaj-found.or.jp/2016aya_research/（アクセス日2016.10.21）.
8）中野民夫，堀　公俊．対話する力　ファシリテーター 23の問い．東京：日本経済新聞出版社；2009：27.
9）永田裕子, 篠木絵里, 濱田麻由美．看護における「事例検討会」に関する文献検討．東京医療保健大学紀要　2012；6（1）：43-49.
10）楠瀬しのぶ．元気が出る！仲間がつながる！事例検討会　土佐市の事例検討会の取り組み．地域保健　2016；11：24-29.

（受付　2016年９月１日）